

# 認識世界における命題相対化

## 内的世界と外的世界の相互作用

大 橋 哲

### 目次

#### はじめに

1. 命題について
2. 命題相対化
3. 命題相対化の言語シグナル
4. 話者と環境の相互作用
5. 認識世界の低位領域
  - 5.1 外的世界
    - 5.1.1 経験世界
    - 5.1.2 言語情報世界
    - 5.1.3 基準世界
  - 5.2 内的世界
    - 5.2.1 知覚世界
    - 5.2.2 知識・思考世界
    - 5.2.3 心理世界
    - 5.2.4 感情
    - 5.2.5 発話行為
6. NPの意味分類
7. まとめ

## はじめに

言語使用を含む認識活動一般に関与する能力として、比較という認知能力が揚げられる。比較は、言語システムのあらゆる部分や階層の成立に不可欠であり、またその運用にも深く関与していることが知られている。しかし、比較の言語能力との関わり方はあまりにも多用であり、ただ両者に深いかかわりがあることを指摘してもあまり意味がない。言語に果たす比較の役割を知るためには、一定の言語現象にそれがどう関わるかを具体的に示すことで、比較の機能を徐々に特定していかなければならないと思われる。

本稿では、言語能力が比較と関係する1形態として、命題相対化という認知能力を想定する。そして、命題相対化は、話者が環境を認識してそれに働きかける上で重要な役割を果たすことを主張する。

### 1. 命題について

「命題」という用語は、言語学においてさまざまな解釈が与えられており、明確な定義はないといってよい。一般的には、断定(Assertion)、否定(Negation)、含意(Entailment)、前提(Presupposition)、仮定(Assumption)などの対象となる、意味内容表現であり、真または偽の真理値(Truth value)が付与されるものと定義されている<sup>注1</sup>。

命題は、文の種類との対応関係で説明されることが多く、平叙文(Declarative Sentence)、疑問文(Interrogative Sentence)、命令文(Imperative Sentence)のうち、平叙文は命題を表すと考えるが、疑問文や命令文は命題を表すとは考えないという立場がある。この立場の根拠は、Mary keeps a dog.のような平叙文に関しては真偽を判定することができるが、Does Mary keep a dog?のような疑問文やKeep a dog.のような命令文は真偽の判定のできるものではないというものである。また、平叙文のように見えてもI order you to keep this dog.というようにいわゆる遂行文(Performative Sentence)は、その働きにおいてはKeep this dog.という命令文と同じであるので、やはり命題を表すとは考えないという場合もある。このような立場は、文の形式(つまり一部の平叙文)にまず真理値を結びつけ、それを命題と呼ぶものである。平叙文以外の文については、命題は表されないことになるが、この立場で言う「命題を表す、表さない」とは、いったいどういうことであろうか。この立場は、つまるところ平叙文の中の1種類、つまり、真偽の判定のつくと思われる文を命題と呼ぶという用語の議論にとどまるように思える。命題とはある特殊な種

類の文に与えられた名前にすぎないとするなら、冒頭に示した一般的定義にある「意味内容表現」という抽象的な概念は余分なものになる。もしそれが文とは違う抽象的な存在であると仮定するならば、疑問文Does Mary keep a dog? が平叙文Mary keeps a dog. と共有する意味内容（どちらもメアリーと犬の関係を表現していることなど）を無視して、後者にのみ命題を表す性格を認めることはできないはずだからである。

また、命題と文の対応関係の説明として、They keep a dog.とA dog is kept by them.の2つの平叙文は共通の意味内容をもっており同一の命題を表すという場合がある。更に、日本語の「かれらは犬を飼っている」という文もこれらの英文と同一の命題を表すということもある。便宜上、これらの文に共通する命題を、they-keep-a-dogなどのように表示するのが通例である。この立場では、命題を文の一種類としてではなく、言語の別や表現形式の違いを超えた抽象的な存在として捉えている。いくつかの異なる文法形式を持つ平叙文や異なる言語の平叙文が共通な意味内容をもつ場合に、その意味内容を命題と呼ぶものである。したがって、命題と文は一対一対応の関係にはない。

命題をこのように抽象的意味内容と捉えるならば、平叙文だけではなく疑問文や命令文にも命題が表されているというように考えないのは、むしろ不自然に思える。例えば、Do they keep a dog?という疑問文や、Let them keep a dog.のような命令文も、平叙文They keep a dog.と同様にthey-keep-a-dogという意味内容を表していると考えるのは自然である。もちろん、そのような考え方を拒む理由は、真偽の判定がつくのは平叙文だけであり、真理値をもつという命題の条件を、疑問文と命令文が表わす意味内容は満たしていないからである。

ここで見えてくることは、平叙文にのみ命題を認める立場は、真理値が命題に内在的な特質であると考えているということである。真理値が命題に内在的な特質ではなく、それに付与されるものであるとするならば、命題を表現する文内だけで必ずしもその真理値が定まるとは限らず、真理値の決定要素は文外にあるのかもしれない。もしそのように考えるならば、疑問文や命令文の表す意味内容を、その文内で真理値が決定しないことを理由にして命題とは見なさないという立場はとれないはずである。仮に、平叙文の表現する意味内容のみを命題と見なしながら、真理値は命題に内在するものではなく付与されるものであると考えているとすると、平叙文においてのみ文内で真理値の付与が完結するのだと考えていることになる。

しかし、自然言語の平叙文がそのような特性を持ち合わせてはいないことは、論

理学で用いられる命題との比較などでよく指摘される点である。実のところ平叙文であっても、その文の表す命題の真偽はその文の用いられた文脈が特定されなければ判定することができない。例えば、They keep a dog.やA dog is kept by them.などの文では、theyという語の指示対象が特定されなければ、真理値は問題にもならないであろう。そもそも、命題に真理値を付与するとはどういうことであろうか。自然言語で言う真理値の付与は、論理学で、命題をpという文字で表し、それに属性として真 (T) 又は偽 (F) という値を機械的に付与する作業とはかなり性質が異なる。

自然言語の文について真偽が問題になるのは、それが実際に特定の目的のために用いられた場合にのみである。そのような文は発話 (Utterance) と呼ばれるが、真理値は使用状況を見捨てて作成された文との関係で考察されるべきものではなく、発話に関して考察されなければならない。話者が実際にThey keep a dog.という文を聴者にむけて事実報告のためなど、特定の目的のために発話したときのみ、真理値が問題になる。そのときには、この文のthey-keep-a-dogという命題が、話者の認識した現実と一致している、すなわち真であることが主張されていると考えられる。つまり、自然言語における真理値とは、命題とそれを照合する状況の関係とみなすことができるのである。

したがって、自然言語でいう命題の真理値とは、命題自体に内在する特質でもないし、それを表す文内で決定されるものでもない。命題の真理値の決定には、命題を照合すべき状況の特定が不可欠なのである。命題と照合される状況が一致するならば真、そうでなければ偽となる。これは、論理計算のために命題に機械的に真 (T) 又は偽 (F) という値を付与するのとは訳が違う。

命題の真理値は命題に付与されるものであり、命題と対応する状況を特定し、それとの照合の結果であるとするならば、そのような過程においては命題の真偽がまだ定まっていない状態も自然に想定できる。Do they keep a dog?という疑問文を話者が発話することは、they-keep-a-dogという命題の真理値の判定を聴者に委ねているだけである。また、Let them keep a dog.という発話は、同様の命題を話者が望む現実の状態と一致させるように聴者に要望しているのだと考えられる。更には、話者がThey keep a dog.と発話した場合でも、they-keep-a-dogという命題が聴者の認識する現実と一致するとは限らない。その場合は、同一の命題が話者と聴者の認識する二つの対立的な状況と照合され、それぞれとの関係において異なる真理値を付与されることになる。

命題は抽象的な意味内容表現であり、それを特定の状況と照合して真理値が判定されるということを述べてきた。しかし、ここまでは、命題は文によって表現されるもの、あるいは文から抽出するものとして扱ってきた。既に存在する文から命題を取り出す作業は、典型的な発話の状況を想定すれば、聴者の行う作業である。話者は逆に、文の発話に先立ちそれに含まれる命題を想起していると仮定するのが自然である。そうでなければ、命題は文に偶然内在するものになってしまう。本稿では、文によらなくとも話者は命題を想起することができ、多くの場合その命題をさまざまな状況と照合しそれぞれの状況につき真理値を判定したうえで文の発話に至ると仮定する。

## 2. 命題相対化

筆者は、命題が複数の状況と照合される過程を命題相対化と名づけ、以下に示すような関数处理的な作業を想定してきた（拙論1998）。

$y = f(x)$  独立変数 $x$ : 命題が照合される状況（世界）

従属変数 $y$ : T (True) / F (False)

関数 $f$ :  $p$  in  $x$

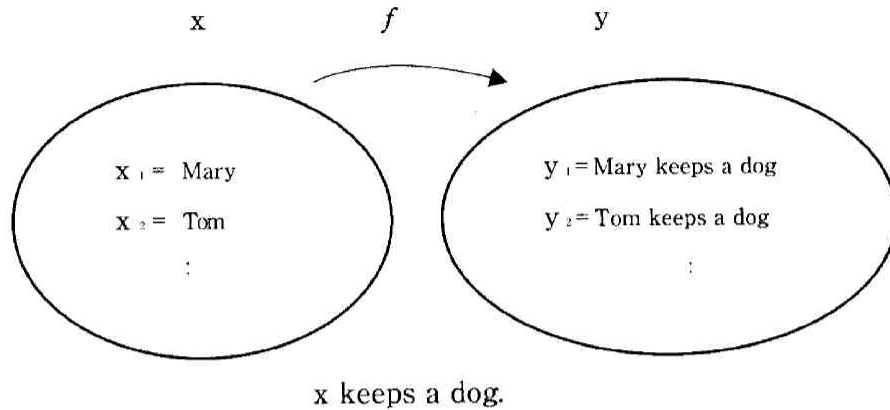
いわゆる命題関数という時には、中に独立変数を含む $x$  keeps a dogというような形式を意味し、変数 $x$ にMaryやTomなどを代入し、Tom Keeps a dogや Mary keeps a dogなどの命題を従属変数値（命題関数値）として得るものをいう。このような場合には、命題関数の適用される範囲（range）は前提されているといつてよい。つまり、独立変数にMaryやTomなどを代入した結果、値として得られる命題の真理値は、真であることが前提となっているか、あるいは問題とされていない。

一方、命題相対化を説明する関数処理は、命題 $p$ に付与される真理値について、命題を照合するさまざまな状況を比較するものである。独立変数は命題を照合する状況であり、従属変数はその命題に付与される真理値、つまり、真か偽である。関数 $f$ は「状況 $x$ と照合すると $p$  ( $p$  in reference to  $x$  /  $p$  in the context of  $x$ )」という意味構造であるが、ここでは便宜的に $p$  in  $x$ と表記する。命題関数と、命題相対化を図示すると図1のようである。

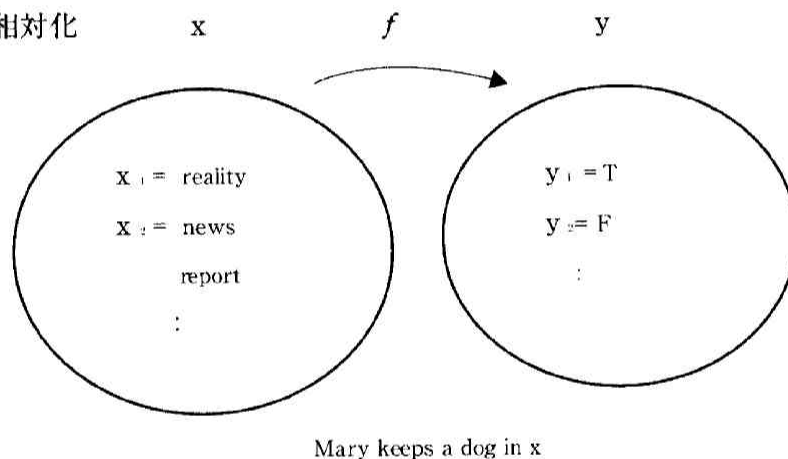
筆者は、文章内で同一の命題が繰り返し表現されている場合、又はその繰り返しが暗示されている場合に、文脈からその命題を照合すべき二つの状況（又は世界）を取り出し、それらをその命題の真理値について比較する作業が、文章構造に重要な役割を果たすと考え、その比較作業を命題相対化と呼んできた。例えば、文章内

図 1

命題関数



命題相対化



である命題pが理想として述べられ、同じ命題pが現実では否定されているような場合には、命題相対化が関与している。理想と現実という二つの世界を同一の命題pに付与される真理値について比較する作業が想定できる。そして、このような比較は、理想と現実の対立から生まれる葛藤を表現することになり、最も頻繁に見出される文章構造の1つである問題-解決という構造の中における問題部分を構成する要素となることが多い。また、ある情報源の主張する命題pを書き手が否定するような場合にも、やはり命題相対化が想定される。この場合には、対立する世界は、情報源と書き手の認識世界と見なすことができる。このような比較は、訂正という機能を果たし、新聞の編集者への読者からの手紙などに頻出する文章構造である。命題相対化はもちろん世界の対立的な比較だけをいうのではなく、二つの世界で同一の命題に同じ真理値が付与される場合も多い。命題pが仮定として述べられ、現

実でもpが肯定されることで、仮定－実証というような意味機能を果たす場合は、その1例である。

命題相対化が文章内で果たすこれらの機能の特定は、この認知能力の特徴の一端を示すに過ぎない。しかし、文章内でのその機能が、問題発見や、仮定と事実の対照などといった、我々が外界を認識しそれに働きかける過程を表現するための重要な要素となっていることを考えると、その記述は極めて重要であり、それを基にしてより一般的な命題相対化の特徴が明らかになることも期待される。

### 3. 命題相対化の言語シグナル

筆者は、命題相対化の特徴を記述するためには、それによって比較される「世界」がどのような表現と意味的な特徴をもつのかを明らかにする必要があると考え、命題相対化の関与を示すと思われる言語シグナルを頼りに、そのような表現を集め、それらの意味的な特徴を分析することにした。そのような言語シグナルの例として、in accordance with NP, contrary to NPなどの複合前置詞句がある。これらの表現からは、命題相対化の各要素を取り出すことが可能である。

1) ...time since the early 1940s Yul was neither a resident nor a citizen of the United States. And, in accordance with Swiss law, Yul's passport did not mention his birthplace, Vladivostock: instead, it named h...

(Cobuild Collocation on CD)

2) Nicky Hughes explores this ancient craft. Contrary to popular belief, a thatcher's work doesn't only occupy the summer month.

(Cobuild Collocation on CD)

1) では、対比される世界（独立変数値）として機能する要素はin accordance with につづくSwiss lawと主節の過去時制で示される現実である。照合する命題pは、one's- birthplace-be-not-mentioned-in-one's-passportとでも示すべき、主節に含まれる意味内容である。複合前置詞句in accordance with NPは、照合の結果命題はどちらの世界においても同じ真理値を得ることを示す。この命題相対化の機能は、文の複合前置詞句以外の部分によって表現されている事態の合法性を主張することだと考えられる。法律（law）世界と現実世界を比較するためには、Yul's passport と his birthplaceがそれぞれ命題pを表す表現の中においてはone's passportとone's

birthplaceという一般的な情報に書き換えられていることから分るように、共通の命題pを取り出すために現実世界の命題を一般化するか、あるいは逆に法律の一般的命題を個別化する作業が含まれると考えられる。2)では、popular beliefと文の現在時制によって示される一般的事実が比較され、前者との照合において命題p(a thatcher's-work-occupy-the-summer-month)が真と判定されるのに対して、後者との照合では偽と判定される。この命題相対化の機能は「訂正」と考えられる。

上記のように、in accordance with NPやcontrary to NPなどの複合前置詞句は命題相対化の関与を示す言語シグナルと見なすことができる。NPには、主に文の主動詞で表現される世界と比較される世界を表現する語 (law, popular beliefなど)が含まれる。従って、NPとして機能する表現の意味的な特徴が明らかになれば、命題相対化の特徴の一端が明らかになるとことが予想される。

#### 4. 話者と環境との相互作用

複合前置詞句in accordance with NPやcontrary to NPなどの NPの意味的な特徴を探るということは、命題相対化という認識作業において、命題の真理値について比較されるそれぞれの「世界」が、どのような意味的な特徴をもち、互いにどのような関係にあるのかを考察することである。それぞれの言語シグナルによって、NPとなる表現には違いがあるであろうし、それを比較することにも重要な意味があると思われるが、本稿ではcontrary to NPという複合前置詞句に現れるNPに分析対象を絞って、その意味的特長を探ってみたい。

命題相対化は、話者が自らの置かれた環境を理解し、それとの相互作用を行うために必要な認知能力である。本稿では、比較されるそれぞれの世界が、命題相対化のこの究極的な目的にかなった意味的な特質を備えており、話者と環境の相互作用に果たす役割の違いによって、いくつかのグループに分類できると仮定する。まず話者と環境からなる認識世界を想定し、その認識世界をNPの意味分析を基にいくつかの領域に分ける。話者は、それぞれの領域において命題の真理値を比較する作業を通じて、環境と相互作用を行うのであるが、NPは命題相対化を行う領域を特定する役割を果たす言語手段と考える。本稿で示す認識世界の分類は、contrary to NP という表現のNPとなる語句のみを頼りに想定するものであるので単純な試案の域をでないと思うが、筆者のねらいは、命題相対化を通して話者が環境との間に相互作用をもつことを示す認識モデルの素案を提示することにある。

話者と環境の相互作用という観点から、まず大まかに、話者の内的な世界（内的



世界)と話者を取り囲む環境(外的世界)という二つの領域から成る話者の認識世界を想定する。便宜上、話者の認識世界における内的世界と外的世界の相互作用を、図2に示すような2重の円・矢印・点で図式的に表す。内的世界を示す円を、外的世界を示す外円で取り囲み、二つの世界の関係とその作用の方向を矢印で示したものである。点は命題が照合された世界の特定を示す。内的世界と外的世界の相互作用は、以下の例で示すようにいくつかの構成要素の組み合わせとして説明される。

- 1) 点A: 外的世界と命題の照合
- 2) 点Aと矢印a: 外的世界と命題の照合、そして内的世界への作用
- 3) 点B: 内的世界での命題の照合
- 4) 矢印aと点B: 内的世界への作用と内的世界での命題の照合
- 5) 点Bと矢印b: 内的世界での命題の照合と他の内的世界への作用
- 6) 点C及び点Dと双方向矢印c: 内的世界と外的世界での命題の真理値が不整合同様に、作用の有無とその方向、世界の特定と命題照合という要素の組み合わせとしていろいろな相互作用の特徴付けが可能である。

図2

話者の認識世界

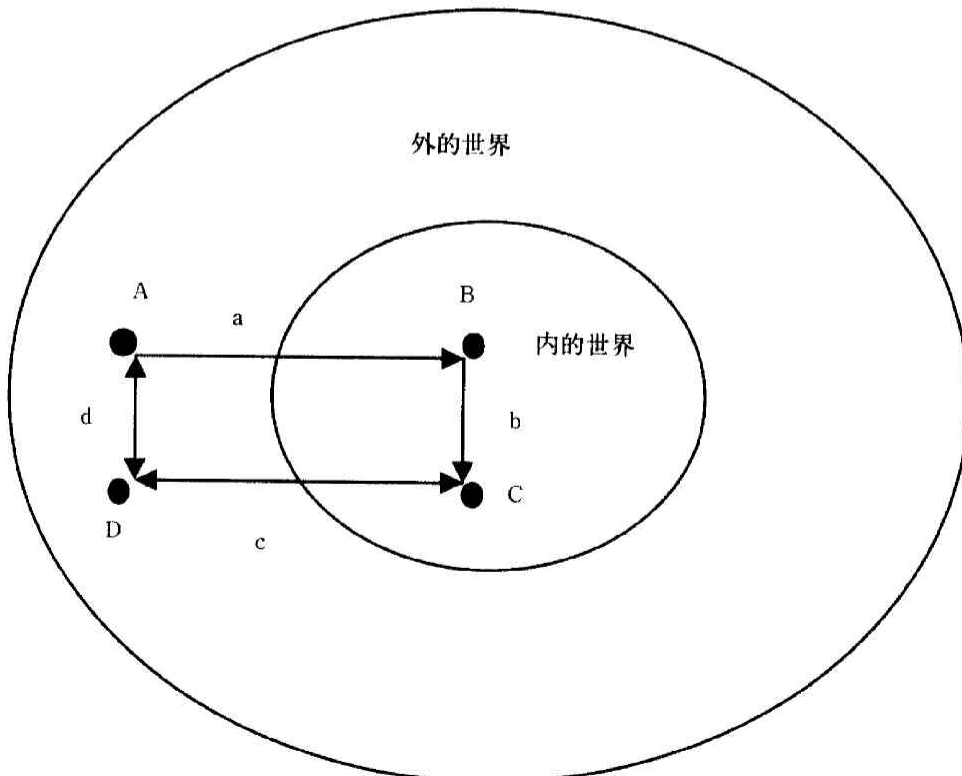


図2は、命題相対化が内的世界と外的世界の相互作用に関わる様子を簡略化して示したものである。実際には内的世界と外的世界の複数の下位領域で複雑な命題相対化が行われると考えられるが、どのような命題相対化もこれらの要素の合成としての説明が可能である。

## 5. 認識世界の下位領域

以下に論ずる認識世界の下位領域は、実際には、それぞれが互いに複雑な関係で作用し合っていると考えられる。その関係は、2領域間の関係として捉えられる単純なものはむしろ少なく、複数の領域が互いに関与し合い特殊な意味機能を生むことが多いと予想される。また、外的世界の2領域間に命題相対化が生じることもあれば、内的世界の2領域間に生じる場合もある。更には、以下に論ずるそれぞれの領域の構成要素である下位領域の間に生じる場合もある。従って、本稿で論じる単純な相互作用のモデルは、将来そのような複雑な関係を体系的に記述するための道具立ての第一歩と考えて欲しい。

以下に示す単純な認識世界の下位領域の特徴づけは、外的世界と内的世界の相互作用を単純な往復運動的に説明しようとしたときに、その作用の連鎖の構成要素としての特徴を重視したものである。

### 5.1 外的世界

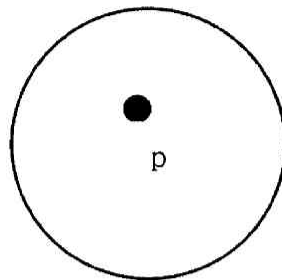
外的世界には、3種類の下位領域を想定し、それぞれ経験世界、言語情報世界、基準世界とする。

#### 5.1.1 経験世界

経験世界とは、話者の経験する事実や出来事からなる世界である。この世界で命題 $p$ が真であれば、その命題は話者の認識する現実の出来事や事実と直接照合される。直接照合されるという意味は、内的世界との相関関係を前提とせずに、外的世界が独立した存在として認識されているということである。例えば、話者が隣人についてThe Smiths keep a dog.という文を発話し直接経験に基づいた事実を述べる場合、命題 $p$ (The-Smiths-keep-a-dog)は、現実と直接照合される。事実の認識過程における話者の主観的な判断の介入、即ち外的世界と内的世界の相関関係は問題にされていない。外的世界のみが意識されている状態であり、話者の内的世界がそれとどう関わるかということは問題にされていない。命題は話者が経験した現実の出来事や事実を刺激として想起される。[ 図3参照 ]

図 3

認識世界＝経験世界



話者の認識世界には経験世界だけが意識されていて、命題の照合に主観的判断を含まない。  
The Smiths keep a dog.

### 5.1.2 言語情報世界

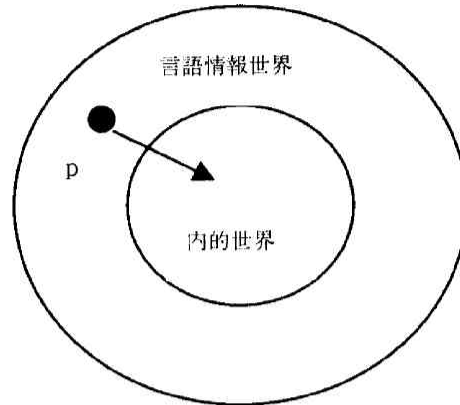
命題を照合する世界が言語的事実である場合、その世界を言語情報世界と呼ぶ。発話などの音声言語情報や、本・手紙・新聞などの文字情報などからなる世界である。例えば、スミス家について書かれた新聞記事の中にThe Smiths keep a dog.という文が含まれている場合、命題p(The-Smiths-keep-a-dog)は、それと照合されて真と判定される。仮に話者がThe paper reports that the Smiths keep a dog.と発話したとすると、命題pはthe paper reportsという表現によって特定される言語世界との照合においては真であるが、他の世界との照合の結果は不明であることが暗示され、命題相対化が関与することになる。

言語情報世界の特徴は、その世界で真理値を付与されている命題が、その言語情報を理解した人の内的世界にも必然的に想起される点である。そもそも言語情報は、それと接触する人に対して伝達される目的で存在しているのであるから、必然的にその人の内的世界への作用を持っているともいえる。その時点では、内的世界での命題の真理値は未定である状態が想定できる。[図4参照] しかし、普通は内的世界の照合されるべき領域が特定され、命題に真理値が付与される。例えば、新聞記事の主張する命題を、それを読んだ読者が経験世界でも真であろうと信じるか否か、又はどの程度信憑性のある命題として受け取るかということが問題となる。この点で、言語情報世界は、後述する「心理世界：信念 (belief)」の特徴である認識的可能性 (epistemicity) とも関係する。図5は、言語情報世界で主張された命題を話者が信じて、I believe the report that the Smiths keep a dog.と発話するような場合を表している。[図5参照]

仮にスミス家の生活を直接知っている人が新聞記事の読者であるような場合には、前述した経験世界との照合がなされ、命題pが経験世界でも真と判定されれば

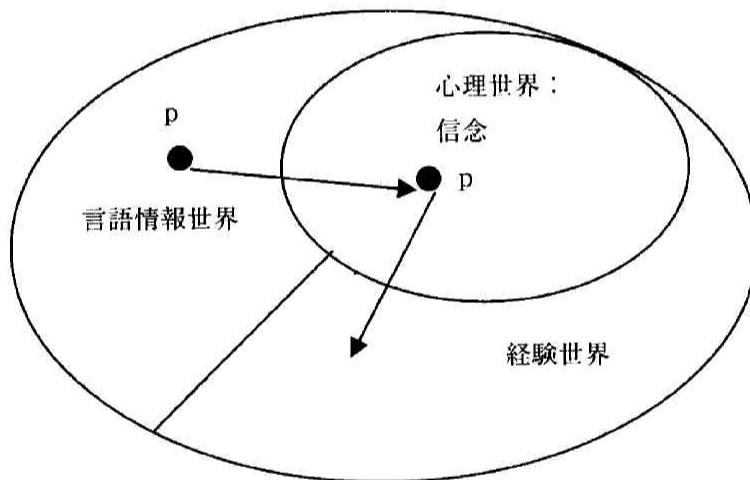
図 4

外的世界 = 言語情報世界



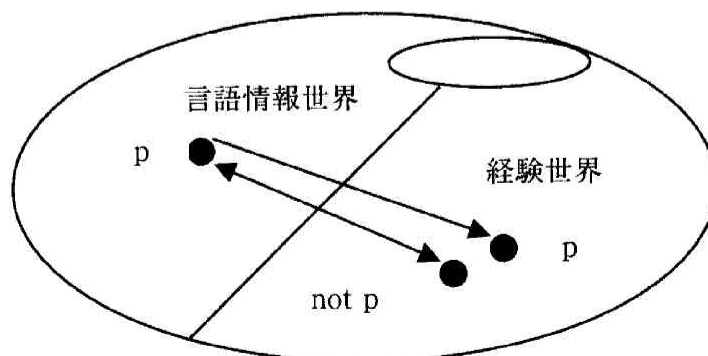
言語情報世界から内的世界  
への作用  
The paper reports that  
the Smiths keep a dog.

図 5



言語情報世界において真の命題p  
は、心理世界：信念においても真  
I believe the reports that  
the Smiths keep a dog.

図 6



p = 確認  
It is true.  
not p = 否定  
It is not true.

新聞記事の主張は正確であることが確認されるし、偽と判定されれば誤報として否定される。[図6参照]

### 5.1.3 基準世界

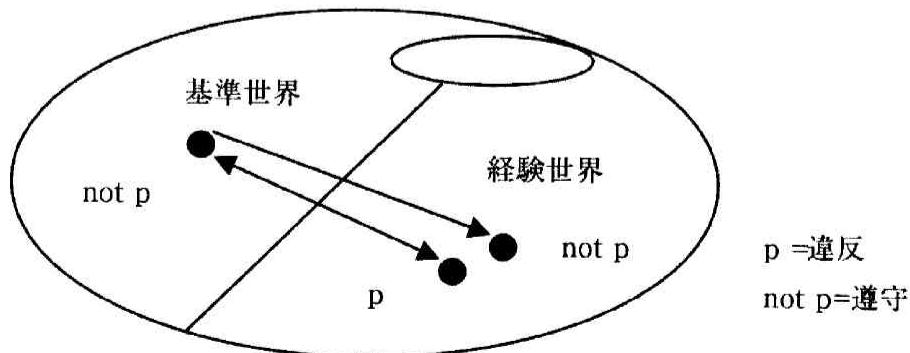
もう一つの外的世界は、一般的に義務の源(Deontic Source)<sup>#2</sup>と呼ばれる法律や、社会的きまりなどに代表される基準世界である。この中には、法律のように文字化された体系も含まれるので言語情報世界との交わりがある。法律のような規則の体系もあるが、宗教の教え、主義、利益、役割など行動の基準となるものを広く含む。

ある集合住宅においてThe residents cannot keep dogs.という規則があるときに、命題p (the-residents-keep-dogs)はその基準世界において偽であり、つまり違反行為を表す。その命題が経験世界で照合され、現にその住宅の住人について真であるならば、その人は規則違反となるであろうし、偽であるならば規則を遵守していることになる。[図7参照]

また話者が、命題pが経験世界においても偽であることを強く望むような場合、例えば、聴者に対して命題pの表す行為を禁止する意図がある場合には、後述するように「心理世界：願望(desire)」においても命題pが偽であることが前提となる。つまり、話者の内的世界と命題pの照合が問題となる。[図8参照]

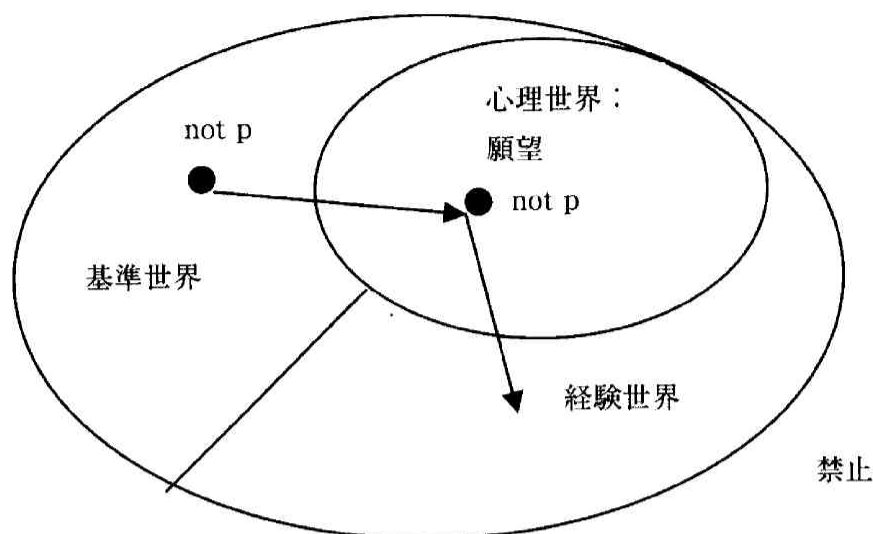
基準世界で真理値を判定された命題は、その規則に関係する人がそれに実際に従う意志をどの程度強く持つか、あるいは、他の人がそれに従うことをどの程度強く望むかということが問題となる。この点で、基準世界は、「心理世界：願望(desire)」の特徴である義務的可能性(deonticity)の根源と見なすことができ、義務の源とも呼ばれる所以である。そもそも規則とは、それに関係する者がそれを遵守する意思をもつように存在するものであり、言語情報と同様に、必然的に内的世界への作用をもっているのである。

図7



The Smiths break / comply with the rule not p.

図8



I shall order you to comply with the rule that not p.

以上の3世界は、現実の出来事や事実、言語情報、基準という外的世界で経験されるものからなる。3世界の間には明確な境界線を引くことができるわけではない。例えば、反復して観察される事実は規則性を帯びるであろうし、上述のように、規則の多くは同時に言語情報として存在するものでもある。

## 5.2 内的世界

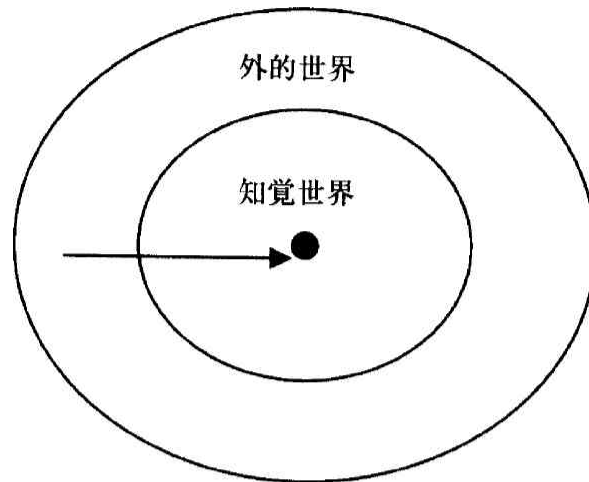
以下に示すのは内的世界を構成する下位領域である。

### 5.2.1 知覚世界

経験世界は、命題pが直接照合される事実や出来事からなり、その照合に関する話者の主観的判断の介入は問題になっておらず、その意味で内的世界とは独立した外的世界と考えられるのであった。知覚世界は、外的世界の実事や出来事からなるものではなく、話者の視覚・聴覚などの感覚を通して内的世界に取り入れられた事実や出来事からなるものである。つまり、外的世界が知覚を通して内在化した世界と見なせるものである。従って、外的世界から内的世界へという作用をもつが、命題が真理値を得るのは知覚世界においてである。[ 図9参照 ]

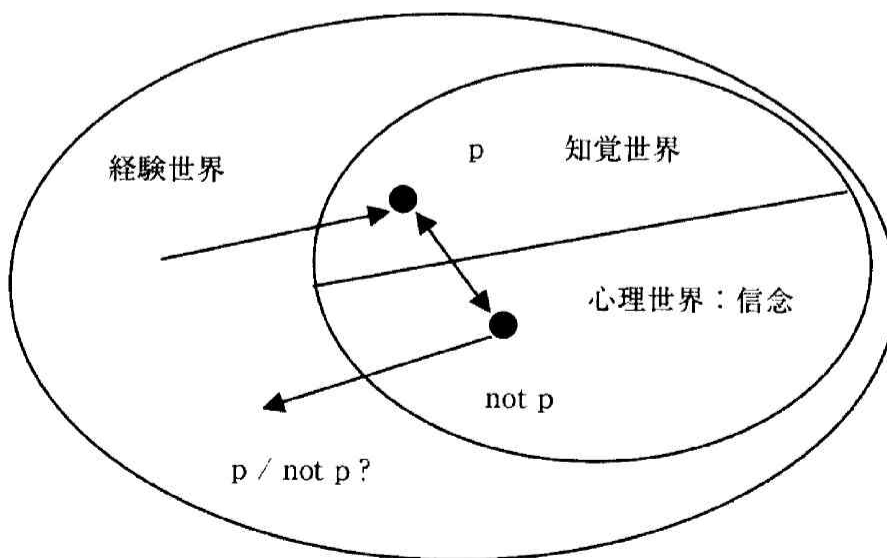
知覚は、経験世界の実事や出来事を認識する際には常時関与していると思われるが、その関与が主観性と結びつけられ内的世界として意識されることは比較的まれである。それゆえに、経験世界の実事や出来事は普通内的世界からは独立して直接に命題と照合され得ると考える。しかし、知覚世界と命題が照合され内的世界として意識されることもあるという事実は、I saw the van park outside my house at

図9



10 o'clock.などといった発話で、知覚自体が一つの出来事として報告されるような場合から窺い知ることができる。また、I can't believe what I'm seeing—is that car really yours?という発話には、知覚世界で真と判定された命題  $p$  (that-car-be-yours) が、believeで表現されていると考えられる心理世界では偽となり、reallyで表現されていると考えられる経験世界ではどちらか判定できないことが述べられており、命題相対化の過程において、知覚世界が世界の一つとしての役割を果たしている。[ 図10参照 ]

図10



I can't believe what I'm seeing—is that car really yours?

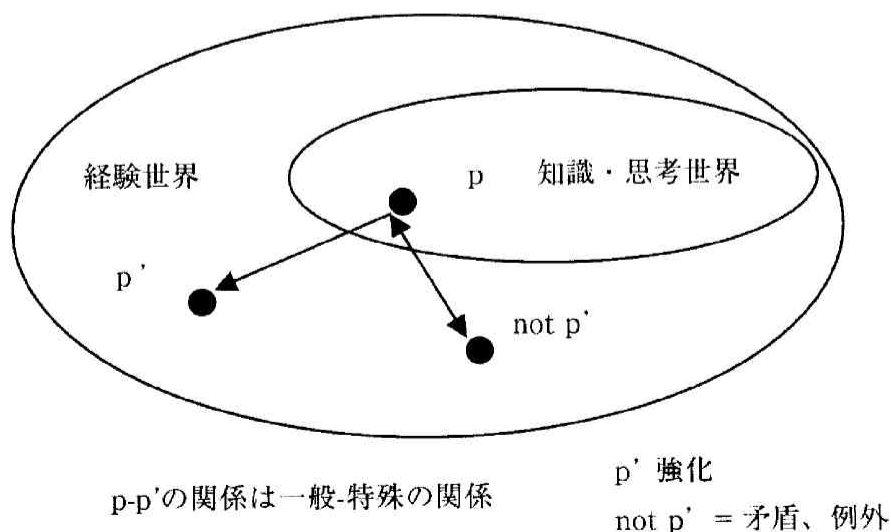
### 5.2.2 知識・思考世界

知識・思考世界は、話者の外的世界や知覚世界における個別の経験（経験時に特有な状況と命題pの照合）が何度か繰り返されるうちに、各状況の共通部分は取り出され特殊部分は切り捨てられるという経過を経て状況が一般化された結果、普遍性をもつ知識として内在化した命題の体系である。この世界では、命題が外的世界の事実や出来事の刺激を受けなくとも自発的に想起され得る。その意味で、外的世界からは独立した、内的世界の低位領域と見なす。一般化の過程には、さまざまなレベルがあり得る。例えば、All creatures die.などという発話は、知識・思考世界と命題の照合を前提としていると考えられるが、All human beings die. という発話に比べると、命題が照合される状況の一般化の程度はより高く、命題の普遍性がより高い知識といえる。

知識・思考世界で真理値を付与された命題p (All-human beings-die) は、経験世界でその具体的命題であるp' (Mary-die) が同じ真理値を付与されれば、知識としての普遍性が維持されるであろうし、そうでなければ、例外をもつか体系に矛盾が生じることになる。[ 図11参照 ] 外的世界との相関関係はそのように深いものであるが、外的世界からは独立しても存在し得る世界である。

また、命題が普遍的な知識となる一般化の過程には、帰納的推理や演繹的推理が関係すると推測される。推論の段階がより複雑になれば、その結果として生み出される命題は、外的世界の経験から生じる命題からの独立性がより高くなると思われ

図11





る。既存の知識としての命題が組み合わされ、新しい命題が作り出される作業が思考であるとすれば、そのような作業に関わる命題の体系が知識・思考世界である。

照合される状況の一般性・命題の普遍性という点では、外的世界の下位領域である基準世界と類似している。知識とは規則性を持つものである。本稿では、命題が言語化されて経験世界に存在すると考えられるようなものは全て基準世界の要素として扱うが、実際は、その命題が知識として内在するものであるかどうかの判別は不可能な場合が多い。知識・思考世界の命題は、基準世界の命題と同様に、後述する「心理世界：願望 (desire)」の義務の源として機能したり、また、「心理世界：信念 (belief)」の認識的可能性の程度を判断する論拠ともなる。

### 5.2.3 心理世界

心理世界は、Searle (1979) の言う命題態度という概念に概ね対応するものである。命題態度とは、発話行為理論(Searle)において、信念(belief)、願望 (desire)、意思(intention)、感情(feeling)といった基本的には4種類の、命題の事実性や実現について話者が持っている心理的態度と定義されている。それぞれの命題態度は以下のように説明される<sup>注3</sup>。

信念 (belief)：命題の表す事柄が真実であるという信念。

願望 (desire)：命題が表す行為を聴者に実行してもらいたいという願望。

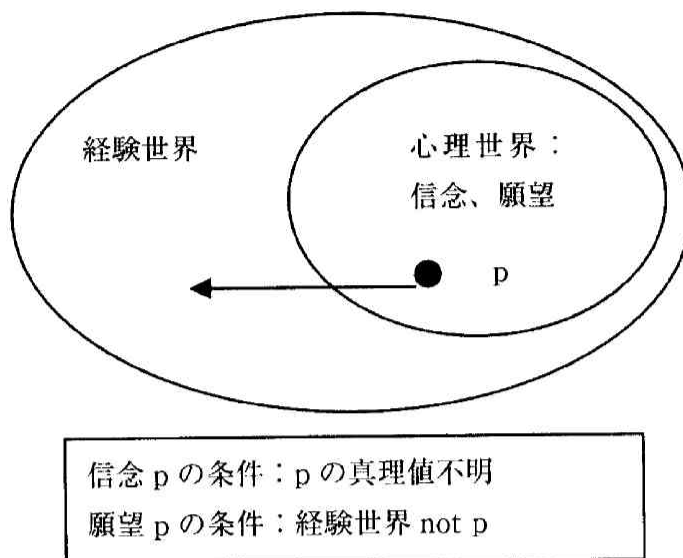
意思 (intention)：命題が表す行為を話者自らが実行しようという意思。

感情 (feeling)：命題が表す過去の事柄に対する話者の心情。

本稿でいう心理世界は、これらの命題態度のうち信念、願望、意思の3つに関係するものである。信念、願望、意思の特徴は、いずれも経験世界との関係その意味に含んでいることである。これらの心理世界で命題が真と判定されたならば、経験世界でもその命題が真であるという信念、経験世界でもその命題を真にして欲しいという願望、経験世界でもその命題を真にしようという意思を表すことになる。つまり、心理世界の命題は、経験世界の事実や出来事との照合を意図して想起されるのであるから、心理世界は内的世界から外的世界へという方向の作用を持つと考える。[ 図12参照 ]

心理世界の命題は、経験世界でも同じ真理値をもつことが意図されているが、そもそも心理世界で命題が主張されるにあたっては、次のような条件がある。心理世

図12



界：信念において命題pを主張する時点で、経験世界における命題pの真理値が既に判定されてしまっていないこと。これは、経験世界の実事と命題pが照合されて真理値が既に判定されているのに、その上心理世界において命題pの経験世界における真理値を主張することには何の意味もないからである。また、心理世界：願望及び心理世界：意思において命題pを主張する時点で、経験世界では命題pが真ではないことも条件である。これは、経験世界で既に命題pが真であり、命題の照合される事実や事柄が存在するならば、それを願望するというのは意味を成さないからである。

Searleの命題態度の分類は、後述するように、それと対応する発語内行為の特質に応じたものである。願望と意思の違いは、前者が命題の表す行為を実行するのが聴者である発語内行為に対応するのに対して、後者は実行者が話者のものに対応する。しかし、いずれも経験世界において命題pが真であることを望む話者の心理状態であることには変わりがなく、本稿では、心理世界を以下のように分類する。

### 心理世界

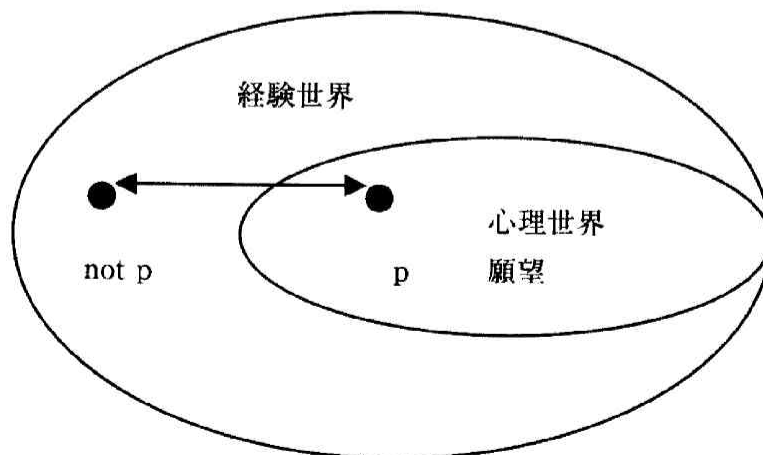
- 信念 (belief) : 話者がそうであ(っ)たろうと信じている経験世界
- 願望 (desire) 聴者実行：聴者にもたらして欲しい (欲しかった) 経験世界
- 話者実行：話者自らがもたらしたい (もたらしたかった) 経験世界
- 中立 : そうあって欲しい (欲しかった) 経験世界

命題態度を発語内行為との関係で説明しているSearleの理論では、願望は命令

(order) や依頼 (request) などと対応する。そのため、願望の対象となる経験世界は、その未来についてのみである。しかし、命題相対化の観点からすれば、経験世界に対する願望は、その未来のみを対象にするものではない。つまり、「そうあって欲しい経験世界」だけではなく、「そうあって欲しかった経験世界」も想定される。更に、聴者実行と話者実行の別も考慮するならば、「聴者にもたらしめて欲しかった経験世界」と「話者自らがもたらしめたかった経験世界」が想定される。You should have helped me.やI wish I had never met you.などの発話は、これらの世界における命題の照合を前提としていられる。また、これらの発話は、経験世界においては同じ命題が偽と判定されていることを暗示している。[ 図13参照 ] このことは、願望の内容である命題が経験世界において真ではないという条件と矛盾しない。また、I hope it will be fine tomorrow.のような発話に想定される、命題の実現に関して「実行者」が問題にならない中立的な場合も、命題相対化の観点からは重要である。

心理世界の特徴の一つは、本来心理的態度である信念や願望に程度があることである。その命題が経験世界で真（或いは、偽）であることをどの程度強く信じるか、その命題が経験世界で真（或いは、偽）となることをどの程度強く願望するかということが問題になるのである。この特質が、心理世界：信念(belief)の認知的可能性(epistemicity)であり、心理世界：願望(desire)の義務的可能性(deonticity)である。可能性の程度は、真理値の判定がいかなる根拠によっているかに左右される。認知的可能性の程度に影響を及ぼすのは、真理値の問題となる当の命題が、他のどのような世界でどのような真理値を付与されているのかということである。仮に、言語

図13



You should have helped me.

情報世界で命題pが真であるならば、その世界が新聞なのか近所の噂話なのかで、認知的可能性の程度は異なることが予想される。また、義務的可能性の程度は、基準世界においてその命題に付与されている真理値と、その世界の義務の源(Deontic Source)としての特質によると考えられる。

#### 5.2.4 感情

Searleの提示した命題態度のうち4番目の感情は、他の3つとは性質が異なる。上掲の定義によれば、感情は、過去の事柄について話者の持つ心情である。話者の心情であるから、それは内的世界の存在と考えられる。しかし、それは他の命題態度のように内的世界の低位領域とは見なし難い。感情の対象となる命題は、過去の事柄すなわち経験世界の出来事や事実と照合されたものなので、内的世界の低位領域である心理世界（願望や信念）の命題のように経験世界との照合がまだ行われていないものとは異なる。心理世界の中でも例外として、前述したように、心理世界：願望の一種である「そうあって欲しかった経験世界」は、経験世界における命題pの真理値が偽と判定していることを暗示するものであるが、経験世界における命題の真理値が偽であることを主張するのがその本来の意味ではない。感情は、他の命題態度のように命題の真実性や実現性という経験世界との関係が問題とされているのではなく、感情の対象となるのは経験世界での真理値が既に確認済みの命題なのである。

仮に、他の命題態度と同様に感情も内的世界の一種と見なすと、その世界で主張される命題は、以上に説明したように経験世界でもまた真理値の判定したものである。そのような内的世界の一種として感情世界というものを想定してみるならば、喜び(happiness)や怒り(resentment)などの感情を一種の世界と見なすことになろうが、喜びの世界などというのはその実体がどうもはっきりしない。また、以下に示す1)、2)と3)、4)の間には、同格のthatの用法に明らかな違いがある。

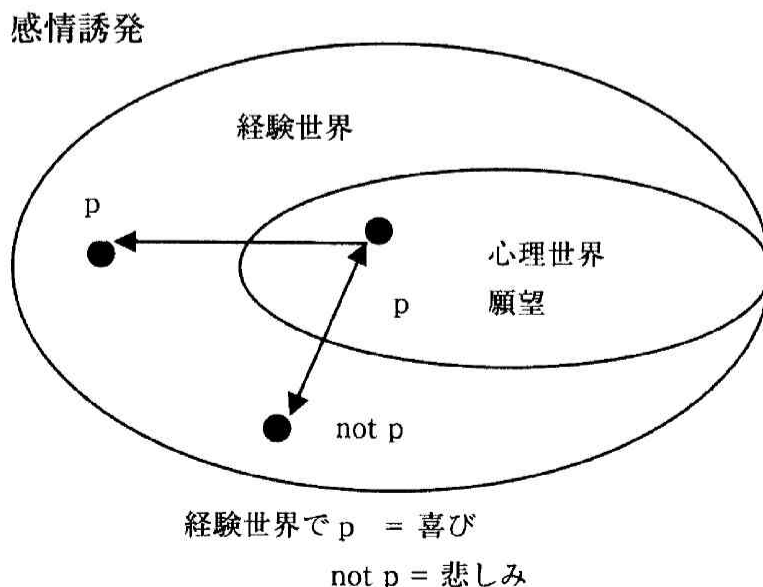
- 1) He expressed his happiness that he had passed the test.
- 2) She felt resentment that nobody paid attention to her words.
- 3) He expressed a desire that the paper should be made public.
- 4) She started taking money from her employer, in the mistaken belief that she would not be discovered.

1)、2) で、感情表現と同格のthat節が表現する命題の間には、因果関係を認めることができるが、3)、4) の心理世界を表す表現と同格のthat節が表現する命題の間には、そのような関係は認められない。1)、2) における因果関係の存在は、そもそも感情の定義が「命題が表す過去の事柄に対する話者の心情」であることを思えば自明なことともいえるが、感情を心理世界と同等に扱うべきではないことを示す1つの根拠と思われる。

また、命題相対化の言語シグナルともいえるcontrary to NPやin accordance with NPなどの表現の中でNPは世界を表現する語句であるが、desire, beliefはNPとして用いられるのに対して、happiness, resentmentなどの語がこれらの表現のNPとなることはない。

本稿では、経験世界で照合された命題を更に照合する内的世界の1種として感情を捉えるのではなく、感情は、経験世界と心理世界の間で命題相対化が行われた結果生じる心情であると考ええる。例えば、話者が心理世界：願望で聴者にもたらしたい経験世界の命題pを想起していた場合に、経験世界で実際に命題pが照合されるならば、結果として喜びという感情が生じ、喜びの強さは願望の特徴である義務的可能性(deonticity)の程度に応じて変化すると仮定する。義務的可能性の高い心理世界：願望で命題pが真であるのに、経験世界でpが偽と成れば、怒りなどの感情が生じるであろう。心理世界：信念の場合も同様に、認識的可能性(epistemicity)の程度の高い心理世界：信念で命題pが真であるのに、経験世界でpが偽と成れば、困惑、驚きなどの感情が生じるであろう。[ 図14参照 ]

図14



### 5.2.5 発話行為 (Speech Acts)

Searleのいう4種類の命題態度には、以下に示すような4種類のグループの発話内行為を対応させることができる。

1. 陳述表示型(Representatives)：話者が発話の命題内容が真であるという「信念」を持ち、聴者にその「信念」を伝達し、命題内容が真であることを知らせることを発話の目的とするもの。(この型に属する行為を表す動詞の例：affirm, allege, assert, claim, declare, inform, maintain, predict, prophesy, report, say, state, tell etc.)
2. 行為指導型 (Directives)：話者が発話の命題の表す行為を聴者に実行してもらいたい(聴者が実行すべきだ)という「願望」を持ち、その「願望」を実現させるように聴者に仕向けることを発話の目的とするもの。(この型に属する行為を表す動詞の例：ask, beg, command, demand, implore, instruct, order, permit, plead, prohibit, question, request, require, solicit, summon, etc.)
3. 行為拘束型 (Commissives)：話者が発話の命題の表す行為を自ら実行しようという「意思」を持ち、その「意思」を表明し、行為の実行を請合うことを発話の目的とするもの。(この型に属する行為を表す動詞の例：bet, bid, guarantee, offer, pledge, promise, propose, volunteer, vow, etc.)
4. 感情表明型 (Expressives)：話者が発話の命題の表す事柄に対して何らかの「感情」を持ち、その「感情」を聴者に表明することを発話の目的とするもの。(この型に属する行為を表す動詞の例：apologize, compliment, condole, congratulate, deplore, greet, thank, welcome, etc.)

これらの発話内行為を本稿の心理世界の分類との関連で論じれば、陳述表示型の発話内行為は心理世界：信念という内的世界の1領域における命題pの主張を前提として遂行されるということになる。行為指導型の発話内行為は、心理世界：願望の聴者実行型に、行為拘束型は、心理世界：願望の話者実行型にそれぞれ対応する。感情表明型は、心理世界と経験世界を比較する命題相対化の結果生じる感情を前提とする。

心理世界という内的世界での命題の照合を前提に遂行する発話行為の結果、命題は発話となり、音声という物理的な性質が与えられる。その時点で、命題は外的世界の一部となるわけである。外的世界の中で、その命題を表現する発話は、言語情報世界を構成することになり、また外的世界と内的世界の相互作用に取り込まれて

いくのである。

以上の説明は、心理世界が内的世界の出口となりそこでの命題の主張がすぐ発話につながるような印象を与えるかもしれないが、もちろんそうではない。実際に発話行為を遂行することは、聴者と社会的な関係を結ぶことであり、聴者の認識世界や社会的地位など、多くの要因が絡んでくる。陳述表示型の発語内行為であれば、上記の定義にもあるように、聴者にその「信念」を伝達し、命題内容が真であることを知らせることを発話の目的とするのであるから、話者の認識世界には、聴者の姿があり、聴者は今問題となっている命題をどのように受け取るか、或いは聴者の認識世界では今その命題がどう位置付けられているかということを判断して、実際の発話に及ぶはずである。本稿で論じてきたのは、発話行為の遂行の前提となる話者の認識世界についてのことだけであり、それは発話行為の遂行に必要な要素の一部に過ぎない。

## 6. NPの意味分類

### 経験世界

action, behaviour, evidence(証拠となる事実), experience (出来事), history, reaction, vote, state, what has happened

### 言語情報世界

Dr Weeks (情報源としての人名), the Commission (団体), the Word of the Lord, biblical account, adage, article (記事), bulletins, commentary, definition, depiction, description, eulogy, evidence (証言), familiarity breeding contempt (諺), flyer, folklore, information, President George Bush's initiative (主唱), labelling, labels, language, legend, letter, advance publicity, myth, mythology, pan, picture, prejudice, propaganda, political punditry, record, rhetoric, rumour, saying, story, title, version, what critics say, words, what I wrote,

### 基準世界

Islam (宗教), the third Geneva Convention, art 119 (規則体系), article (契約の項目) all that democracy stands for, character, cease-fire, clause(契約書の条項), code, conditions, common sense, constitution, convention, the course of history, custom, Declaration of Rights, democracy, dogma, doctrine, ethos, figures,

freedom, the common good, gospel, grammar, guide, guidance, guidelines, instructions, integrity, interests, jurisdiction, justice, law, line, manifesto, model, morality, nature, norm, normal behaviour, objects of the 1974 Act, optimism, order, peace, philosophy, platform, policy, position, practice, precept, program, regulation, religion, reputation, restriction, rights, role, rule, scheme, scriptures, section 1, spirit, stance, standards, teachings, tenets, terms, theory, tradition, training, treaty, trend, usage, welfare, wisdom, wording

### 知覚世界

appearance, image, impression, observation, outlook, perception, sense, tone, his Spiting Image persona, what I heard, what I read, what I was taught, what I am seeing,

### 知識・思考世界

analysis, assessment, conclusion, concept, decision, experience (見聞、知識), idea, implication, interpretation, judgement, logic, meaning, misapprehension, notion, opinion, point, rectification, resolution, speculation, thinking, thought, truth, understanding, view, imagination,

### 心理世界

aim, assumption, belief, commitment, desire, diffidence, expectation, fear, feelings (意見・信念), hope, insistence, instinct, intent, intention, objectives, obligation, preference, purpose, scepticism, supposition, suspicions, what should be done, will, wish

### 発話行為

advice, agreement, allegation, announcement, answer, argument, assertion, assure, claim, comment, compromise, contention, criticism, denial, depiction, forecast, guarantee, prediction, proclamation, promise, pronouncement, proposal, protestation, recommendation, report, statement, stipulation, telling, undertaking, warnings,



上掲の単語のリストは、The Independent on CD-ROM (1 October 1990-31 December 1991) をデータとして、contrary to NPという表現のコンコーダンスを調べ、NPの中から主要部名詞のみを取り出して分類したものである。分類の基準は、その単語が前節で論じた話者の認識世界のうち、どの領域の特徴を一番強く持っているかによった。

主要部名詞のみを取り出したことについては、明記すべき点がある。Contrary to NPという表現を含む文の典型的な機能は、NPの表す言語情報世界や基準世界で主張した命題を、話者（又は書き手）の経験世界で否定することである。その結果、誤った情報の訂正や、義務の不履行や矛盾を表現することになる。従って、NPによって表現される世界は、話者の経験世界とは対立的な関係にあるものとして表現される。しかし、本稿の目的は、話者の認識世界で命題相対化が機能する様子を示すことにあり、その下位領域を表現する語句を広く収集することであるから、NPに話者の否定する世界を現す語句ばかりが現れるのは都合が悪い。具体的には、生のデータとしてNPに widespread belief（多くの人に共通の信念）が現れた場合、それを否定する話者の立場からすれば、それは外的世界の言語情報世界か基準世界に属するものである。しかし、本稿の目的のために主要部名詞だけを取り出して、beliefがいかなる特徴を持つかを考えれば、それは話者の内的世界の1領域である心理世界：信念に属する語として扱われるのである。また同様に、発話行為の遂行は、話者の心理世界での命題の照合を前提に遂行されるはずであるが、NPに現れる、Mr de Klerk's categorical denialなどは、話者の立場からすればやはり外的世界の言語情報世界の情報に過ぎない。しかし、主要部名詞を抜き出して、denialを話者の認識世界の発話行為を示す語として扱うのである。つまり、widespread beliefをmy beliefとして、Mr de Klerk's categorical denialをmy denialと「読み替えて」扱うわけであるが、この事実は、認識世界の下位領域を特徴付ける語句を分類するという目的のためには本質的な問題とはならないと思われる。他人が信念beliefをもったり、否定という発話行為denialを遂行したりするなら、話者自身も同様であると考えすることは、むしろ当然なことである。逆に、このような「読み替え」作業を仮に行わないらば、ほとんどの場合が話者からみた外的世界の言語情報や基準世界と認定されて、内的世界に関しては意味のないデータとなってしまおうであろう。

しかし、contrary to NPという言語シグナルを基にして表現を収集したことが、データに明らかな特徴を与えていることは事実である。上述したcontrary to NPの意味的特徴は、言語世界と基準世界のグループに属すと判定される語が多いことを

予測させるものである。対照的に、経験世界のグループに属する単語が非常に少ないのは、NPは話者の経験世界によって否定される世界であるので、NPもまた経験世界であれば論理的に矛盾するからであろう。そもそも経験世界は、話者の内的世界との関係から生じる主観性を意図しないで、命題が直接現実世界の事物と照合される世界である。この経験世界の性質は、contrary to NP のNPとなる世界に要求される性質とは不整合なのである。上掲リストの経験世界に属している単語にしても、実際のデータでは修飾語がついていて、行動や判断の基準としての意味合いが加えられており、実際の文脈では基準世界として機能しているものが多い（例：EC joint action, settled reasonably orderly behaviour, received history, normal daily experience）。また、出来事や事実を表す単語でも、contrary to との共起ゆえに、単語の意味の中で命題相対化を可能にする側面が強調される。（例：本来 vote は投票という出来事だが、その手続きや過程に含まれる物理的な側面ではなく、意思決定(decision)に関する側面が取り出されてNPとして用いられている。従って、知識・思考世界と見なすこともできる。）他の言語シグナルとの比較は本稿の目的ではないが、in the light of NPのNPには、経験世界を表現すると思われる語が多くある。（例：circumstances, fact, events, realities, experience, history, situation, context, scene, past, situation, developments, issues, incidents, case, last decade, economic climate, scandal, crisis, war, problems, legacy, outcome, factors など。）この種の語が現れないのは、contrary to NPという言語シグナルの意味的な特徴といえるのである。

経験世界を示す単語が少ないという事実と似たことが、知識・思考世界についてもいえる。上掲のリストには、知識 (knowledge) という単語が含まれていない。この単語は、in the light of NPやin accordance with NPなどのNPには含まれ得る単語なのである。このこともまた、contrary to NPという表現のNPの性質とknowledgeという単語の意味が不整合であることを示している。

このような事実に対する一貫した説明を行うためには、認識世界を構成するそれぞれの領域の固有な特徴や、相互関係についてより多くの事実を確かめなければならない。

## 7. まとめ

本稿では、話者と環境の相互作用を命題相対化という認知能力との関連で説明した。まず、話者の認識世界を内的世界と外的世界の相互作用の行われる場と見なし、

それぞれにいくつかの下位領域を措定した。それぞれの領域は、命題の照合順を基準にした相互作用の方向性と、contrary to NPという複合前置詞句のNPの意味分析をもとに、素案として提示したものである。その領域とは以下のようなものである。

外的世界の構成要素：経験世界、言語情報世界、基準世界

内的世界の構成要素：知覚世界、知識・思考世界、心理世界

話者はこれらの領域と命題をいろいろな方法で照合し、命題の真理値についていくつかの領域を比較して発話行為の遂行に至ると仮定するが、この過程が命題相対化である。比較される領域には固有の特徴があり、比較のパターンによって感情、訂正、強化、矛盾、禁止、などいろいろな意味機能が生まれることになる。

ただし、それぞれの領域はその境界のはっきりしたものではなく、必ずしも命題相対化の関与している領域の特定が可能なわけではない。この領域の境界の曖昧さ、或いは、それぞれの関係の複雑さは、その領域を特定する一つの言語手段といえる contrary to NP のNPを意味的に分類することの難しさがものがたっている。NPは、命題が照合される領域を特定し、他の領域との関係も暗示して、命題を相対化する働きを果たす。しかし、特定といっても、領域を直接指示するようなものではなく、逆に、NP自体のもつ各領域の意味が引き出されるとも考えられる。例えば、証拠(evidence)という単語は、その物理的な側面をが強調されれば経験世界に、言葉としての側面が強調されれば言語情報世界に属するものとして上掲のリストでは分類した。しかし、証拠を基にある判決が下されるなら、当然それは判断の基準と成っているはずであり、基準世界に属すると考えられる。また、判決に至るまでの論理的な思考過程に取り込まれた側面が強調されれば、それは知識・思考世界に属するということに何の無理もない。特定というのは、このような意味であることを明記した上で、NPは世界特定要素と呼び、認識世界の下位領域である世界とは区別する。

## 注

注1 荒木一雄・安井稔（編）（1992）『現代英語文法辞典』pp.1170-71. 三省堂

注2 この用語については、Lyons（1977）843頁参照。

注3 以下の発話行為の説明に含まれる用語等の日本語訳は中野弘三（1993）の解説に従った。

参考文献

- Austin, J.L. (1962) *How to do things with Words*. London: Oxford University press.
- Allwood, J. Anderson L.G. and Osten, D. (1977) *Logic in Linguistics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Hermeren. L. (1978) *On Modality in English. A study of the Semantics of the Modals*. Lund: CWK Gleerup.
- Horn, L.R. (1989) *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, R.W. (1987) *Foundations of cognitive grammar I*. Stanford: Stanford University Press.
- Lyons, J. (1977) *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G.N., and Svartvik, J. (1972) *A Grammar of Contemporary English*.
- Ohashi, S. (1998) "Propositional Relativization in Written Texts." *Kanagawa University Studies in Language* 20. Kanagawa University Institute of Language Studies.
- Searle, J.R., (1969) *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J.R., (1979) *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Winter, E.Q. (1974) "Replacement as a function of repetition: a study of some of its principal features in the clause relations of contemporary English." Unpublished Ph.D. dissertation. University of London.
- Winter, E.Q. (1977) "A clause relational approach to English texts: a study of some predictive lexical items in written discourse." *Instructional Science* 6.1.
- Winter, E.Q. (1982) *Towards a Contextual grammar of English: the Clause and its Place in the Definition of Sentence*. London: George Allen & Unwin.
- 太田朗(1980) 『否定の意味』大修館書店
- 坂原茂(1985) 『日常言語の推論』東京大学出版会
- 中野弘三(1993) 『英語法助動詞の意味論』英潮社
- 波多野誼余夫(1982) 佐伯伴 (編) 『推論と理解』東京大学出版会
- 毛利可信(1980) 『英語の語用論』大修館書店